

憎悪を生みださないために

上 廣 哲 治

新型コロナウイルスの感染拡大とともに、カタカナ語を耳にすることが多くなりました。パンデミック（感染症の世界的大流行）しかり、クラスター（感染集団）しかり、オーバーシユート（爆発的感染拡大）しかり、テレワーク（在宅勤務）しかり。その多くは、コロナ禍が収まれば、次第に人々の記憶から消えていくものかもしれません。しかし、なかなか癒えない傷のように、いつまでも残り続けそうなカタカナ語があります。それは「ヘイトクライム（憎悪犯罪）」という言葉です。

ヘイトクライムは、人種や民族、宗教、性的指向などへの偏見、差別、憎悪を動機とし、個人や集団に対して行われる犯罪行為を意味します。新型コロナウイルスとの関連でいえば、最初に感染が確認されたのが中国だったこともあって、欧米ではアジア系住民に対する感情が悪化し、脅迫や暴行などのヘイトクライムが横行するようになりました。

歴史家の立川昭二さんは著書『病いと人間の文化史』の中で、「疫病がひとを襲うとき、いつも憎悪というもひとつの疫病が流行し、さらに犠牲というもひとつの病菌が発見され、不幸に不幸

をかさねる歴史を性懲りもなく繰り返す」と記しています。

たとえば十四世紀のペスト流行の際、ヨーロッパの人々が「犠牲」として選んだのはユダヤ人でした。「人種がちがい、宗教がべつで、商才にたけ、金儲けがうまいがゆえに、日頃からなにかと憎悪してきたユダヤ人」。ながいあいだの陰湿な反ユダヤ感情が、黒死病（ペスト）の惨禍で理性を失った人びとのあいだで火を噴いた」（同書）のです。デマにもとづいて行われたユダヤ人への迫害は、のちにナチス政権下で行われた迫害にも匹敵する規模だったといわれています。

最近のアジア系住民に対するヘイトクライムの基層にも、以前からくすぶっていた差別感情があり、それがコロナ禍という重苦しい空気なかで「火を噴いた」ものと考えられます。自分たちとは違う「他者」を想定し、彼らを締め出せば安全や豊かさを取り戻すことができるだろう——。こうした思考回路は、現在に限らずいつの時代にも見られました。

旧約聖書の『士師記』には、自分たちの世界から「他者」を排除するやり方についての興味深い記述があります。パレステイナを縦断するヨルダン川を挟んで、東のギレアドと西のエフライムが対立したときのことです。戦いに勝ったギレアドが、ヨルダン川の渡し場を手中に収めると、次のような「事件」が起こります。

「エフライムを逃げ出した者が、『渡らせてほしい』と言って来ると、ギレアド人は、『あなたはエフライム人か』と尋ね、『そうではない』と答えると、『ではシボレットと言ってみよ』と言ひ、その人が正しく発音できず、『シボレット』と言うと、直ちに捕らえ、そのヨルダン川の渡し場で亡き者にした。そのときエフライム人四万二千人が倒された」（新共同訳、『士師記』第十二章）

自分たちと他者を区別する「基準」は、ただ「シイボレット」を正しく発音できるかどうかという点であり、それができないというだけで、多くの命が奪われたというのです。いかにも神話めいたエピソードに思えますが、これと同じような出来事は、百年ほど前の日本でも起きています。

一九二三（大正十二）年九月、関東大震災の混乱のさなか、「朝鮮人が井戸に毒を投げ入れた」「混乱に乗じて暴動を画策している」といったデマが広がり、官憲や民間の自警団によって多数の在日朝鮮人が殺害されました。その際、通りすがりの人に「十五円五十銭」と発音させたり、「君が代」を歌わせたりして朝鮮人を「識別」し、暴行を加えたことが記録として残されています。

犠牲になったのは朝鮮人だけではありませんでした。千葉県の福田村（現在の野田市）では、香川県から来ていた行商人の一行十五人が自警団に襲われ、そのうちの九人が犠牲になりました。襲撃のきっかけになったのは、言葉づかいがおかしいという一点で、聞き慣れない讃岐弁が災いしたとされています。行商人の一行が「何を行つたか」は、いっさい問われることがないまま、発音が自分たちの「標準」と異なっているという理由だけで憎悪が爆発したのです。

私たちは、テレビに映し出されたアジア系住民に対する暴行を見ながら、信じられない思いを抱きます。被害者が「何を行つたか」を問うこともなく、ただ肌の色などの見た目が違うだけで、あれほどの憎しみをもって暴力を振るえること。その思考回路が信じられないのです。

しかし、同様のことがかつてわが国でも行われていたこと、そして今でもいわれない民族差別がSNSなどを通して横行し、ウイルス感染者への差別さえ起きていることを、私たちは忘れてはなりません。そうした現実を批判的にとらえ、どうすればヘイトクライムの悲劇をなくすことができるのかを考

えることは、「我も人も仕合わせ」を追求する者にとつて避けてはならないことではないでしょうか。

ヘイトクライムの加害者を見て驚かされるのは、「自分たちのやっていることは正しい行動である」と信じていることです。ところが、その「正義」の基準となっているのは、肌の色や民族、習慣、性的指向の違いなど、倫理とはまったく関係のないものばかりです。しかも、どんなに無内容なものでも、いったん「基準」や「標準」が設けられると、それに沿つた者だけが「正しい仲間」であり、逸脱している者は恐れの対象になったり、排除の対象になってしまいます。こうして、自分たちの安全や純粋性を守るには、暴力で「よそ者」を締め出しても構わないという発想が生まれるのです。

このような思考回路を覆すことはなかなか困難ですが、私たちにもすぐにできることがあります。ひとつは、漫然と世間の空気に流されるのではなく、ものごとの真偽や善悪について冷静に判断する姿勢を持ち続けること。とりわけ自分自身を批判的に見つめ、差別や排除に少しでも加担していないかどうかを検証してみることです。また、外見や民族などが違うという理由で脅威にさらされている人たちに、しっかりと寄り添っていく姿勢も大切です。彼ら・彼女らが孤立しないよう、あらゆる差別に対して毅然とした態度を示すことや、多様な存在を認め、それぞれの個性を尊重することは、「我も人も仕合わせ」を追求するうえで、重要な課題となるはずですよ。

折しも今年のアカデミー賞で、中国出身のクロエ・ジャオさんがアジア系女性としては初の監督賞を受賞し、韓国出身のユン・ヨジョンさんが助演女優賞に輝いたというニュースが入ってきました。そのユンさんは記者会見で、多様性の大切さについて次のように訴えました。「私たちは等しく人間で、肌の色も性別も関係ない。みんなの色を合わせたらもっと美しくなる。虹だって七色あるのですから」。